

ビエネス 第16号
2010年3月6日
群馬県文化財研究会
論文報告集抜刷

旧菊池敏清家調査報告書

金 加 川 桑 川
井 藤 田 原 寄
淑 浩 常 清
幸 一 雄 稔 和

旧菊池敏清家調査報告書

川 桑 川 川
 寄 原 田 藤
 清 稔 常 浩
 和 一 雄 幸

*所在地 群馬県伊勢崎市北千木町二〇五四

*所有者 菊池さよ子・菊池兵吾

*建築形式 切り妻造り瓦葺総二階建平入り

*平面形式 整形田字型間取り

*建築年代 明治初年頃

旧菊池敏清家の屋敷構え

川 寄 清 和

当家は、伊勢崎市役所に接した北側の道路を東へ向かい、今泉一丁目の信号を通過して道なりにゆるいカーブの道路を進むと、間もなく北千木町の信号がある。この信号を通過し約三〇〇以進むと左側に「源・純手打ちそば・うどん」の大きな看板が立っている。この看板の手前は三叉路になっているので、これを右折し五〇以進むと先方の左側に、枝を道路の上まで張り出した大きな榎の木が目に入る。道路との境は、丸竹を格子状に組んだ垣根を組んでおり、これが当家屋敷の裏（北）側である。

屋敷の南側は、道路との境に切石を組み上げた塀を巡らし、その東側寄りに石塀と同じ切石を四角に組み上げた門柱を立て、屋敷の入り口

としている。なお、この入り口には以前、長屋門を構えていたという【図1】。

敷地内を見ると、敷地のほぼ中央に南向きにした主家を配置し、主屋の南西には少し離れた位置に「離れ家」を設けている。この離れ家は、平成元年に新築した新しい住まいである。

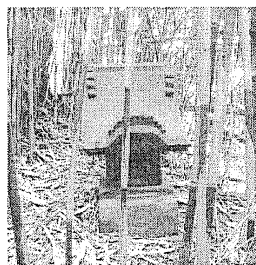
離れ家の南側には、少し離れた位置に「クラ」と称する土蔵がある。菊池利根子さんの話によ

ればその昔は、ほぼ現在の離れ家の位置に凝った造りの「ハナレ」が建っていたという。

またその昔、屋敷の入り口を入るとすぐ右手にもクラ（土蔵）があり、その北側に温室が建っていたと伝え、当時のコンクリート製基礎が残っている。しかし、このあたりは現在、菜園になっている。敷地の北西角の一段高い位置に、石宮を安置しており、その正面に稲荷の文字を確認できる【写真1】。

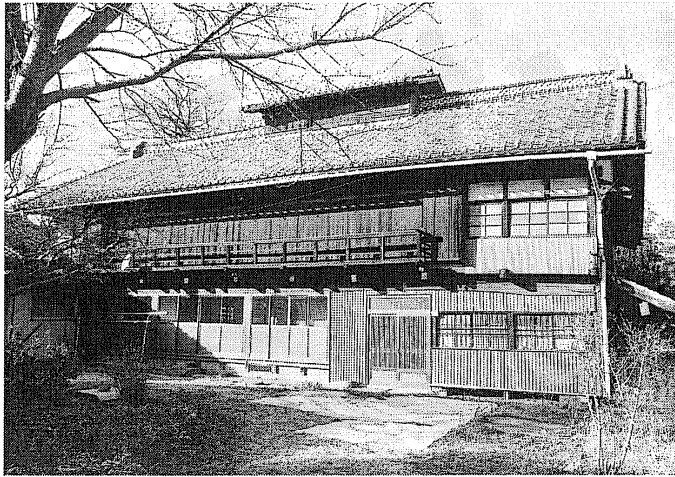


【図1】旧菊池敏清家の屋敷配置図



【写真1】稲荷様の石宮

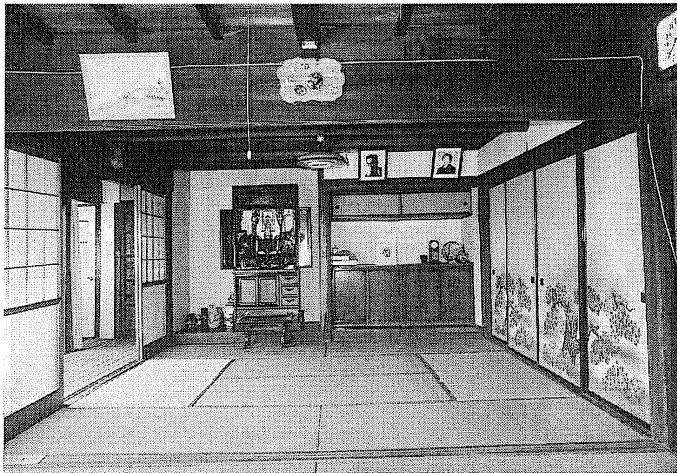
当家の屋敷から少し離れた東南には、菊池家の墓地がある【写真2】。また、当家の南西二百以程の位置に菅原神社が祀られており、菊池家の守護神と伝えられている【写真3】。これは一段高い石積みの上に石宮を安置したもので、文化十一（一八一四）年に再興したとの陰刻文字を残している【写真3】。



【写真4】旧菊池敏清家の外観

具を総て取り除き、四室内いっばいに蚕棚を組んで、この四室をもつぱら「蚕様」の飼育室に当てたのであった。そして人間は、蚕棚の間に寝たのであった。

このような時、人間の移動をスムーズにするために、エンガワ・ローカ・ウラエンなどは、非常に便利であった。また、このような床上の通路は、養蚕飼育のための作業を行なう場合にも、非常に便利であった。従って、エンガワやローカを床上空間の三方に巡らす遺構は、イト



【写真5】ザシキからコザを見る

ザマや棟上に突き上げた檜と共に、発達した養蚕農家の特徴を顕著に示す遺構といえるのである。次に、図2に示した各室の機能について解説すると以下のようである。

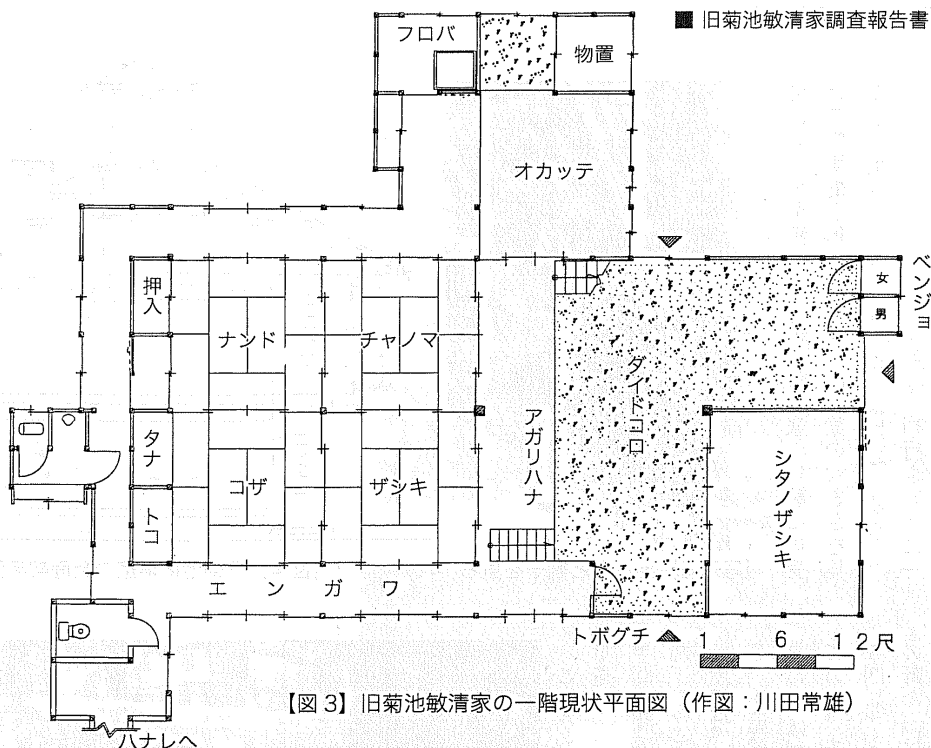
まずアガリハナの機能は、行商や近隣の軽い来客があつた時、アガリハナに腰掛けてもらつて、談笑した場所であつた。アガリハナの大黒柱の前あたりには、建造当初イロリを設けていたと推察する。しかし現状のアガリハナは、後世に張り替えたものであり、さらに調査の時

は家財道具をたくさん積み上げていたので、建造当初にイロリのあつた位置を検証できなかった。

八畳の広さのザシキ（座敷）は、現代住宅にたとえていえば「応接間」に相当する室であつた。即ち、正式な来客があつた場合は、この室が上がつていただき、お茶を出し応対したのであつた。ザシキ裏側のチャノマ（茶の間）は、家族の集まる室であり、現代住宅でいえば「居間」に相当する室であつた。従って、チャノマとナンド（納戸）境の裏側寄りには、鴨居の上部に東向きにした神棚を現在でも設けている。

コザは、上等な客室であつた。そのためにこの室の西側には、立派なトコとタナを備えている【写真4】。例えば、婚礼等の際に主賓、即ち新郎はトコの前に、新婦はタナの前にそれぞれ東向きに正座した。新郎側の一見客はエンガワ側に北向きに、新婦側の一見客はナンド側に南向きに相對して着座し、婚礼の儀式や宴會を執り行ったのであつた。またこのような時は、大勢の客人が参集するため、ザシキ境の建具を取り払つて、コザとザシキを一つの室（続き座敷）として使用したのであつた。

コザの裏側の室であるナンド（納戸）は、家族の寝室であつた。ナンドの西側には、布団などを収納するための、二つの「押入れ」を設けている。納戸の言葉は、平安時代の源氏物語に出てくることなどから、寝室を示す古代まで遡



【図3】旧菊池敏清家の一階現状平面図（作図：川田常雄）

る古い言葉である。ここに、竣工後の改造を含む現状平面図を掲げると、図3のようである。

でもある。当遺構は、このような歴史も秘めていることから、明治初期から昭和戦前の生きた

建造年代について

詳細な調査結果によれば当遺構は、小屋組の部材や二階の一部の柱などに、ホゾ穴などの痕跡を残していることから、多少の改造を行なっている可能性がある。しかし、家屋形式の全体を、変えてしまうほどの大改造ではなかったようである。平面的な面からみても比較的改造が少なく、保存状態もよく建造当初に復原できる良好な状態を保っている。

当遺構は、残念ながら建造年代を直接示す棟札や墨書などを残していない。そこで、柱間寸法をはじめ建築に見る各種の特徴などから推察すれば、当遺構の建造年代は明治初年頃と推定して妥当であると判断する。

特に昭和六年九月六日、当時伊勢崎で予定していた小林多喜二（プロレタリア作家）らの文化講演会の前

近代史の資料ともいえるのである。

このような理由により近い将来、次代に引き継ぐ歴史的遺産として、自治体の手によって何らかの保存対策が計られることを、心から希望する次第であります。

（くわばらみのある・群馬県文化財研究会会長）

主家の構造

加藤 浩 一

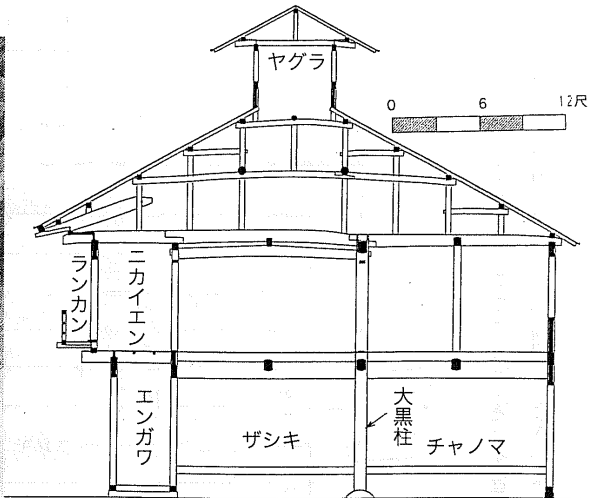
当遺構の骨組み架構は、土間側から見た断面架構図として描くと、図4のようである。礎石には切り石を用い、柱の下に土台を用いている。礎石の上端から二階の出し梁上端までの高さは、九、二五尺（約二、八〇㍎）、二階の出し梁上端から小屋梁上端までの高さは、七、三八尺（二、一三㍎）もあり、軒高の高い民家である。棟上の中央部には、長さ三間の檼を載せ、二階小屋梁の上端から檼の棟木上端までの高さは、一五、三五尺（約四、六五㍎）である。当遺構は総二階造りであり、二階の南側を「出し梁造り」とし、一階より二階の面積を増やしている。そして、出し梁の上部には、一階の縁側より幅広のニカイエン（二階縁・幅五、四八尺）を設け、その先端にランカン（欄干・幅二、〇尺）を張り出し、さらに二階の面積を増加している【写真6】。

これは、少しでも多くの養蚕空間を確保したいという願望を、造形化した架構といえるもの

であり、大量養蚕を旨とした民家の外観に見受ける特徴的な形式である。出し梁の大きさを見ると、幅五・一寸(約一五・四寸)、高さ七・三寸(約二二・一寸)であり、桁行き方向に一間の間隔で架けている。

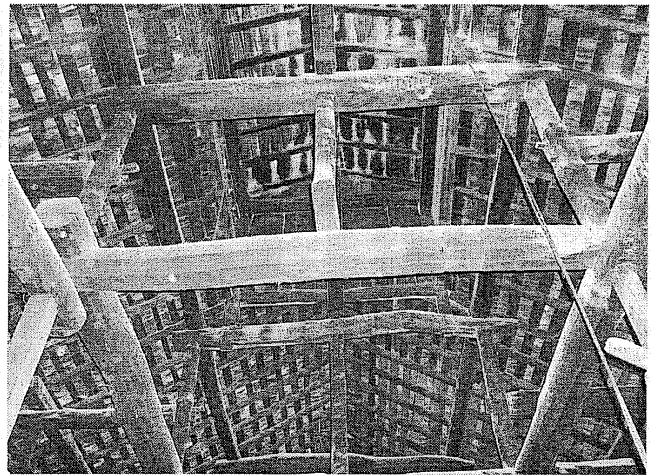


【写真6】 出し梁と欄干を見る



【図4】 旧菊池敏清家の断面架構図

このランカンは、二・五寸(約七・五寸)角で高さ一・八三尺(約五五・四寸)の支柱を、半間の間隔で設け、この支柱上に幅三・一寸(約九・三寸)の笠木を載せたものである(写真6)。屋根は、五・五寸勾配とし日本瓦葺にしている。小屋梁も南側を出し梁造りとし、出し梁の先端には刎ね木を載せ、軒裏を化粧垂木にしている。そして、軒の出を四・一〇尺(約一・二四尺)と大きくとっている。これに対し北側の軒の出は、一・八五尺(約五六・〇寸)と短くしている。なお写真7は、小屋組中央部を見る



【写真7】 梁間中心部の架構をみる

たものである。

(かとう こういち・群馬県文化財研究会幹事)

土蔵の建築解説

金井 淑幸

ハナレの南に、当家で「クラ」と称する土蔵がある。形式は、木造切り妻造り瓦葺二階建とし、梁間一八・六尺、桁行き三一・〇尺の規模であり、正面を東向きにしている【写真8】。

一階には米を収納し、二階に家財道具などを納めていた。クラ前面の向かって左側には、梁間七・一六尺(約二・一七尺)、桁行き二二・四尺(約三・七六尺)の室を張り出し、季節替えの衣類や道具などを納めていた。

瓦葺屋根の下は、土蔵本体の屋根部分まで壁土を厚く塗り、その上に束を立てこの束の上に屋根を載せ置く形式とし、六寸勾配にしている。

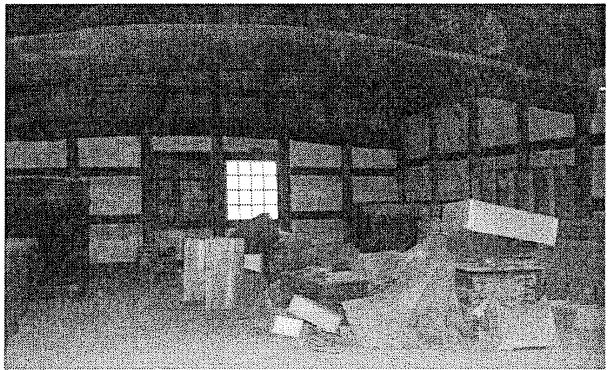
一般に、この屋根形式の場合は、屋根と土蔵本体の間に空間が出来る。しかし、当クラの場合、北側妻壁の上部をウダツツ状に立ち上げ、漆喰壁で塞いでいる。以前は、当クラのすぐ北側にハナレを建てていたというから、延焼防止のためにこのように造つたものと推察する。

クラの正面には、五寸勾配の瓦葺下屋を葺きおろしている。

外壁は、切石基礎の上端から高さ一・一一尺(約三三・六寸)までを腰巻とし、頂部に鉢巻を巡らしている。外壁仕上げを見ると、北側は



【写真 8】 クラ正面（東側）を見る



【写真 9】 クラの 2 階内部を見る

白漆喰塗りのままとし、除く三面を黒く塗った痕跡を確認できることから、当初は全面の外壁を白漆喰にしていたと推測する。

開口部を見ると一階の入り口は、外側に片引きの土戸と、内側に上部を縦繁の格子にした腰高格子戸の二枚を嵌め込んでいる。二階は、南と西の外壁面に設けた開口部に、縦の鉄格子と亀甲網目の金網を嵌め、その内側に片引きの土戸を設けている。

内部を見ると一階の床は、平成十一年にコンクリートにしている。内壁を見ると一階は、柱の間に厚板を落とし込む形式とし、二階は貫を

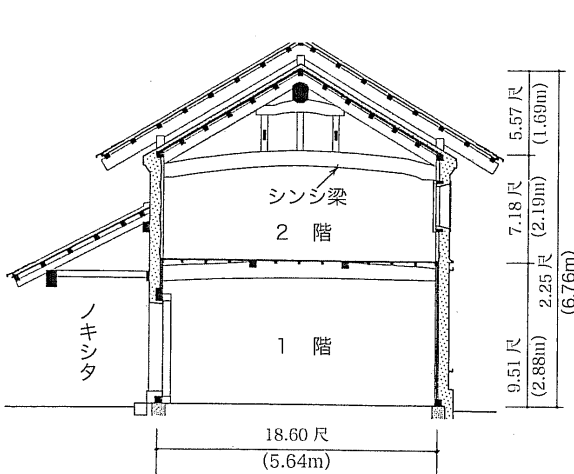
いる。この天秤梁に牛梁を載せ、軒桁と牛梁の上に六、二尺（約一、八八尺）の間隔で登り梁を架け、さらにこの上に直角方向に母屋を載せる。このような骨組みから当クラは、堅牢で丁寧な造りの架構であることがわかる。

当クラの建造年代については、それを直接示す棟札や墨書等を残していない。そこで、基礎に切り石を据えていることや、一階の内壁に厚板を嵌め込んでいること（腰巻切の防御策）及び、クラ全体の造りなどから見て、明治後期頃の建造と見ておけば妥当であろうと考える。

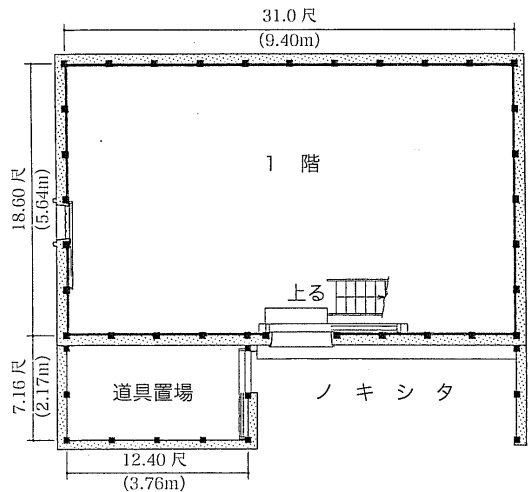
（かない よしゆき・群馬県文化財研究会幹事）

現した白漆喰塗り仕上げにしている。

小屋組みを見ると、両方の妻側から一、二、四尺（約三、七六尺）離れた位置に、それぞれ末口約一尺のシンシ梁を架け渡し【写真 9】、その上に束を立てて天秤梁を受けて



【図 6】 クラの断面図



【図 5】 クラの 1 階平面図